

梶井基次郎

過古





過

古



母親がランプを消して出て来るのを、子供達は父親や祖母と共に、戸外で待っていた。

誰だれ一人の見送りとならない出発であった。最後の夕餉ゆうげをしたためた食器。最後の時間まで照していたランプ。それらは、それらを貰もらった八百屋やおやが取りに来る明日の朝まで、空家の中に残されている。

灯が消えた。くらやみを背負って母親が出て来た。五人の幼い子供達。父母。祖母。——賑にぎやかな、しかし寂さび

しい一行は歩み出した。その時から十余年経った。

その五人の兄弟のなかの一人であつた彼は再びその大都会へ出て来た。そこで彼は学校へ通つた。知らない町ばかりであつた。碁会所。玉突屋。大弓所。珈琲店。下宿。彼はそのせせこましい展望を逃れて郊外へ移つた。そこは偶然にも以前住んだことのある町に近かつた。霜解け、夕凍み、その匂いには憶えがあつた。ひと月ふた月経つた。日光と散歩に恵まれた彼の生活は、いつの間にか怪しい不協和に陥つていた。遠くの

父母や兄弟の顔が、これまでになく忌わしい陰を帯びて、彼の心を紊みだした。電報配達夫が恐ろおそしかった。

ある朝、彼は日当ひあたりのいい彼の部屋で座布団ざぶとんを干ほしていた。その座布団は彼の幼時からの記憶きおくにつながれていた。同じ切れ地で夜具ができていたのだった。——日なたの匂いを立てながら縞目しまめの古ふるりた座布団は膨ふくれはじめた。彼は眼めを瞠みはった。どうしたのだ。まるで覚えがない。何という縞目だ。——そして何という旅情……

以前住んだ町を歩いて見る日がとうとうやって来た。

彼は道道、町の名前が変ってはいないかと心配しながら、ひとに道を尋ねた。町はあった。近づくにつれて心が重くなつた。一軒二軒、昔と変らない家が、新しい家に挟まれて残っていた。はつと胸を衝かれる瞬間があつた。しかしその家は違つていた。確かに町はその町に違ひなかつた。幼な友達の家が一軒あつた。代が變つて友達の名前になつていた。台所から首を出している母らしいひとの眼を彼は避けた。その家が見つかれば道は憶えていた。彼はその方へ歩き出した。

彼は往来に立ち竦んだ。十三年前の自分が往来を走つ



ている！——その子供は何も知らないで、町角を曲つて見えなくなつてしまつた。彼は泪なみだぐんだ。何という旅情だ！それはもう嗚咽おえつに近かつた。

ある夜、彼は散歩に出た。そしていつの間にか知らない路を踏ふみ迷つていた。それは道も灯もない大きな暗闇くらやみであつた。探りながら歩いてゆく足が時どき凹へこみへ踏ふみ落おちた。それは泣きたくなる瞬間であつた。そして寒さは衣服に染しみ入いつてしまつていた。

時刻は非常おそに晩おそくなつたようでもあり、またそんなで

もないように思えた。路をどこから間違ったのかもはっきりしなかった。頭はまるで空虚くうきよであった。ただ、寒さだけを覚えた。

彼は燐寸マツチの箱を袂たもとから取り出そうとした。腕組みうでぐしている手をそのまま、右の手を左の袂たもとへ、左の手を右の袂つっこへ突込んだ。燐寸はあった。手では掴つかんでいた。しかしどちらの手で掴んでいるのか、そしてそれをどう取出すのか分らなかった。

暗闇に点ともされた火は、また彼の空虚な頭の中に点された火でもあった。彼は人心地を知った。

一本の燐寸の火が、ほのお焰が消えて炭火になってからでも、闇に対してどれだけの照力を持っていたか、彼ははじめに知った。火が全く消えても、少しの間は残像が彼を導いた――

突然はげ烈しい音響おんきょうが野の端はしから起った。

華はなばなしい光の列が彼の眼の前を過よぎって行つた。光の波は土を匍はつて彼の足もとまで押し寄せた。

汽き罐かん車の烟けむりは火になっていた。反射をうけた火夫が赤く動いていた。

客車。食堂車。寝台車しんだいしや。光と熱と歡語で充みたされた列

車。

激はげしい車輪ひびの響ひびきが彼の身体からだに戦慄せんりつを伝えた。それははじめ荒々あらあらしく彼をやっつけたが、ついには得体ていの知れない感情を呼び起こした。涙なみだが流れ出た。

響ひびきはついに消えてしまった。そのままの普段ふだんぎ着で両親の家へ、急行に乗って、と彼は涙の中に決心していた。





日本文学電子図書館

---

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷

---



日本文学電子図書館